ベストピア Bestopia
第452号
2024年10月号
bestopia.jp
パリ通信
第154号

# 162歳の引越

8月18日に決断した引越しは思いの重い整理を伴って9月30日に完了しました。
振り返ったときこれらの一連の行為の「初めに言葉があり」ました。
「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。
　主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない。
　恐れてはならない。おののいてはならない」（申命記31章⑧節）
馬場康夫先生から誕生日の祝詞として頂いた御言葉です。

厳しい暑さの中で平均年齢80歳を超えた二人の肉体は限界状況が続きましたが、その場その時で多くの方々の絶大なご支援に助けられ、事は全て整えられていたかのように平穏に進みました。余りの順調さに畏怖を感じるくらいに感謝の山が高く高く積み上がって行きました。その山々を辿ってみたいと思います。

8月17日（土曜日）、二人でこれからの生活のあり方について話し合いを始めました。
問題は二つありました。一つは隣家が鬱蒼とし不気味な屋敷になっている、のみならず樹木が成長して電線に絡まって危険な状態が改善されないこと。
隣家の所有者は横浜の若者で自動車のマニアらしく「湘南ナンバー」を取るために投資目的も含めて買ったらしい。月に一度深夜に訪れ愛車を車庫から持ち出し、数日して又もや深夜に車庫におさめることを繰り返している。いくら注意しても樹木も庭の手入もしない。私の書斎の真正面に見える電線が大きく揺れる度に私は危険を感じて落ち着かない。

市長も東京電力も現場を見て同情はしてくださるが手が出せない。瀬谷区長に至っては問題にもされない。要は事故が起きない限り手が出せないというのが現在の法律です。内容証明配達証明郵便も受け取らないで郵便局も困っています。妻は木が成長して崖が崩れるのを待つしかないとの見解でしたが私はかなりのストレスを感じていました。

二つ目は交通手段の問題です。自宅から最寄りの駅までタクシー代が1200円から約2倍になったこと。小田原駅まで往復すると5500円かかるようになってしまいました。これは仕方のないことですが、引退の身になれば負担は大きいです。妻の運転で当座はしのげても数年先は完全にタクシーに依存することは明らかであるという状況にありました。

8月18日（日曜日）自治会で定められた清掃日に妻が出てくれました。そのおりにご近所の医師から「あなた方はここでずっとお住みになるのですか？この環境を好んでいる人がいます。手放す予定はありませんか」と話しかけられ、妻はびっくりして「今、丁度その

ことを考えているところです。」と答えて戻ってきました。「住みたい人がいる」という情報は願ってもないこと。私たちは「引越し」を決断しました。そして直ちにインターネットで情報を集めて翌日19日には小田原駅前の不動産会社を訪問して目当ての物件について見学をお願いしました。

目当ての物件とは1983年（昭和58年）から３年間私が事務所としていたビルが古くなりこの5月に新築完成したビルでした。懐かしくもあり便利でしたので触手が動いたのですが見学させて頂いて沢山のことを学ばせて頂いてお断りしました。所有者は投資目的で購入した若い人らしい。親切な不動産会社の所長さんの説明にも学びが多くありました。

80歳を超える人に貸す人は殆どいないこと。保証会社を２社つけた上に連帯保証人をつけても不可能なことも知りました。かつてTVでも65歳を過ぎた独り者には賃貸はしないという報道があったことを思い出した次第です。自分が直面するとは思ってもいなかったことです。

20日（火曜日）10時、かねて予約していた葬儀式の相談をするために牧師　馬場康夫先生を訪ねてご指導を頂いた後、私たちはかつてお世話になったピタットハウスを訪ねました。条件は駅から7分位で予算を伝えますとすぐに二つの物件を示してくれました。これらはインターネットには載らない自社管理物件ということ。早速その一つを見学させて頂いて即決したのが今の居宅です。前日の所長さんの言われたように二つの保証会社の審査を受けることが第一の関門、担当の方のご尽力で合格、連帯保証人は不要だが、所有者の承認が必要ということになり、26日に「見守りサービス」をつけることで1年契約が承認されました。この間は受験生が合格の発表を待つ心境でした。担当の方の並々ならない尽力に感謝して、8月30日に契約調印に至りました。

一方、自宅の売却ですが、院長先生の紹介で8月31日、友人の紹介で9月3日、更に4日に院長先生の紹介と３人の方が見学に来られましたが、いずれも家は気に入ってもらえたものの隣の環境が悪いことで断られました。これでは同じことが続くと思い、隣家の解決をしなければならないが、その方法がわからない。私は最後の相談者、安藤博二さんに手紙を書き訪問しました。9月13日でした。１週間ほど待って欲しいと言われたのですが、翌日に電話を頂き物件を買い取ると言ってくれました。驚嘆と感謝で言葉がありませんでした。
安藤博二さんの勧めで9月30日を契約日とすることが決まりました。何事によらず即断即決の人でしたからそのスピードについていかねばなりません。私たちも引越しに本腰をいれ20日「引越しのさかい」にお願いして宝塚の息子夫妻に手伝ってもらい30日の調印に漕ぎ着けたという次第です。

契約書の作成、所有権移転登記など法的な手続きは杉﨑茂弁護士（令和3年旭日中綬章）に依頼、超短期での作成を無理押ししてお願いして30日に間に合わせていただきました。考えれば私の小田原での活動に可能性の芽が出てきたのは杉﨑先生のお陰です。駆け出し

の頃、生活の目処のつけようのない限界状況の時に地元の成長期にある会社を紹介してくださったのです。安藤博二さんもそのお一人です。私の小田原におけるαとΩが杉﨑先生であったことに不思議を覚え感謝に耐えません。
このように多くのご縁に恵まれて最後のコーナーを小田原の中心地で始めることができました。私の小田原での業は驚異的とよく言われます。見ず知らずの地でこうした優れた人脈に恵まれましたが、これらが神によって備えられた道であったことを実感して感謝をしています。主ご自身が私の先に行ってくださり、常に共にいてくださり、道を備えてくださった。冒頭の馬場先生から送られた言葉が成ったのです。かくて私は重荷を降ろし自由が更に増して豊かな恵みの中で快適な生活を楽しみ結婚57年の記念日を迎えました。

# 平和を説き続ける人々

戦争の終結が見えない。ウクライナ情勢については殆ど報道がない。日本の近くでも不穏な発言が続き、争いの準備に余念がない。加えて、異常気象によって世界の各地で能登半島と同じ状態が頻発している。異常気象を含めて全て人間が作り出したもの。人類が作り出したものによって自ら滅ぶということは識者によって随分前から警告されていた。人類はそれを無視し続けてきた。そんな中にあっても平和を説き続ける少数の人々がいる。

日本人にとって平和とは何かと問われる。なんと答えるか。「二度と戦争をしない。武器を輸出しない」と答えるだろうと質問者のノア・サラメーさんは言う。
彼はパレスチナ自治区ヨルダン川西岸ベツレヘムに住む72歳、「紛争解決・再考センター」を運営する人である。

パレスチナ人である彼にとって平和とはシンプルに具体的に次の4点を挙げている。
①完全な「自由」得ること」②「安全」が保障されること。③一人の人間として「尊重」されること④「平等」に接してもらえること。

彼は若い頃抵抗運動に加わって逮捕され15年間収監された経験を持つ。その体験から抵抗の先には平和は生まれないことを知ったと言う。今、彼が主張して普及していること「イスラエル側の思考を変えるには、まずは自分たちが平和を実践する必要がある。だから私は、これからも平和を説き続ける」と言う。そのために設立した「紛争解決・再考センター」運動はヨルダン川西岸の学校を回って平和の理念を説く運動を行っている。若い人への教育が必要だと訴えている。教育が洗脳になっている国がある。かつての日本もそうであった。今の日本も平和より、ある種の洗脳教育がなされる危険が迫っている。教育の方針を決めるのは政治家である。自民党の総裁選挙での決選投票、自民党議員でさえ極右の選択を」避けた行動は注目すべきである。やっとのことで極右への舵きりが止まっている。ノア・サラメーさんの言葉を忘れるべきではない。

# ルーアンのカラヴァッジョ

9月のパリは観測史上最多の降雨量を記録し、10月に入っても冷たい秋雨が続いている。天気予報で雨が降らない日を選んでルーアン美術館へ行った。

パリ・サン・ラザール駅からセーヌ川に沿ってノルマンディーの緑豊かな風景を見ながらノンストップ電車でルーアンまで片道1時間半、距離にして150kmである。セーヌ川が大西洋に注ぐル・アーヴルに次いで人口12万都市ルーアンはノルマンディー地方の行政中心地だ。「百の鐘がある町」と呼ばれていたようにルーアンはキリスト教の主要な地だったが、フランス革命時に多くの鐘が壊されてしまった。百年戦争(1339-1453) 中イギリス軍をオルレアンの戦いで破り、フランス王シャルル7世を勝利に導いたにもかかわらず、1431年5月30日ルーアンで火刑に処されたジャンヌ・ダルク。現在はその火刑台跡に十字架が高く聳え、鱗のような屋根のジャン・ダルク教会が建っている。また、ルーアンと言えばジベルニーに移住したクロード・モネが描いた「ルーアン大聖堂」連作は誰もが知るところである。

SNCFルーアン駅から歩いて10分の所に「ルーアン美術館」がある。15世紀から今日までの絵画、彫刻、デッサン、美術品を所蔵し、常設展示は無料で有難い。7月シチリア島で殺人犯として逃亡するカラヴァッジョ(1571-1610) の作品を見た。1606年5月ローマでラヌンチオ・トンマソーニを剣で刺し殺し、死刑を宣告され逃亡生活が始まり、1610年38歳で亡くなるまでの劇的で絶えず死の恐怖に生きた画家の深さを感じた。。カラヴァッジョがローマから最初に逃れた地はナポリである。当時ナポリはスペイン統治下でローマでの裁判が実行し難い

からであった。1606年10月から1607年7月まで十ヶ月足らずの短いナポリ滞在中に描かれた作品がフランスのルーアンにあると聞いたので見に行った次第である。
1955年8月ルーアン美術館はパリの美術品オークションで一枚の絵を225,000フラン(=38,900€)で購入した。イタリア人画家マッテイア・プレーテイ(1613-1699)作「キリストの鞭打ち」として売りに出されたものである。

ところがその後イタリア美術史の大家でカラヴァッジョ研究第一人者ロベルト・ロンギ(1890-1970)の鑑定によりカラヴァッジョがナポリ時代(1606-1607)に描いたものと認定され、ルーアン美術館が所蔵するカラヴァッジョ傑作となった。ロベルト・ロンギの鑑定の大きな拠り所はナポリ・カポデイモンテ美術館にあるカラヴァッジョの同じ題材「キリストの鞭打ち」(286 x 213 cm)(1607)との比較であった。
キリストはローマ人に捕らわれて、裁判で死刑を宣告される。十字架に架かる前に柱に縛りつけられて鞭打たれる。ルーアンの「キリストの鞭打ち」(135 x 175 cm)(1606-1607頃) は左上から当たる光でキリストの肉体が照らし出されている。縛りられた柱には鞭の跡が見えるが、古代彫刻のアスリートのような身体に傷はなく、背景の暗い闇から神々しく浮かび上がり、キリストの横顔は痛々しい暴力場面から遠く離れたところを見ているようだ。鞭打つ男もキリストを柱に縛りつけた男もその表情はまるで思考しているようで宗教画に止まらない力を持っている。落ちていく赤いマントがキリストの最期を効果的に暗示しドラマ性を高めている。光と影、静と動、神の教えと個人の思い、カラヴァッジョの

作品は人の心に深く入り込む力に満ち、魅了される。ルーアンのカラヴァッジョは135x175cm、横長のサイズで人物は上半身だけの水平の構図である。祭壇画であれば縦長のもっと大きな垂直の構図になることが多いから、祭壇画と同じテーマの個人注文であっただろうと思われている。そのために1955年ルーアン美術館に購入されるまでには何度か所有者も変わり、カラヴァッジョの作品であることさえ忘れられていた。1606年からのカラヴァッジョの足取りには不明点が多く、人の目に触れず、どこかで眠っている絵が他にもあるかも知れない。何世紀も経って市場に現れた一枚の絵、その数奇な運命を思うと何だか愛着と感動が湧いてくる。